

日本の学校教育を見つめながら  
-外国からの子どもたちがくれる課題-

Desafios da educação multicultural na escola japonesa

Chie Hirose<sup>1</sup>

**Resumo:** Para as escolas japonesas, as abordagens em educação para a pluralidade cultural e as concepções de "identidade nacional" e "pluralidade identitária" são temas que se implicam mutuamente. O artigo apresenta experiências colhidas pela autora no estudo etnográfico feito nos anos 1993 a 1998 quando residia e cursava a pós-graduação da Universidade de Hiroshima. Ele analisa alguns conceitos fundamentais da concepção de cultura que permeiam a sociedade japonesa e entre seus educadores. Ao mesmo tempo em que o artigo relata os cotidianos dos professores e alunos que buscam uma convivência integrada com os alunos, filhos de trabalhadores estrangeiros, apresenta algumas implicações dos fundamentos socioculturais para a educação. Argumenta-se que o avanço de propostas curriculares nessa linha passa pela desconstrução e reconstrução das concepções discutidas, à luz de um projeto de valorização da cidadania multicultural e participativa em sociedades plurais.

**Palavras Chave:** Antropologia. Cultura. Educação escolar japonesa. Alunos brasileiros e estrangeiros. Cotidiano escolar.

**Abstract:** 著者が 1998 年広島大学大学院の博士課程にいる時に書いた小論文である。来日した 1993 年から母国を同じくするブラジル人児童生徒とその教師たちと接する機会を重ねた。その経験から日本の学校現場が今まさに変化の時を迎え、複数の出身国、年齢、宗教、文化的背景を持つ生徒との"教育的な関わり方"を模索している現状を知った。人類学的なアプローチから異文化理解について著者が日本に住みながら考えたことを一般の読者向けに紹介したものである。当時の研究内容を取り上げながら、日本の学校で現れている大切な課題を、だれにとってもわかりやすく説明することに努力を尽くした原稿である。

**Keywords:** 文化人類学・民族誌的研究・在日ブラジル児童生徒・学校現場・異文化理解

私は外国から来日した子どもたちが日本の小・中学校で学習する時、教育現場の指導者たちが彼等にどのように対応しているかを見つめようと思いました。<sup>2</sup>特に私と母国を同じくするブラジルからの日系の子どもたちに密着して、自らも日本生活をするにより研究を進めてきました。このことをフィールドワークと人類学では呼びます。今回

<sup>1</sup> É mestre em Antropologia pela Universidade Federal de Hiroshima. Doutora em Filosofia da Educação USP. Atua há mais de dez anos como professora alfabetizadora na Rede Municipal de São Paulo e é professora das Faculdades Integradas Campos Salles e em cursos de pós-graduação no INPG - Instituto Nacional de Pós-Graduação.

<sup>2</sup> チェ・ヒロセ「外国からの子どもたちがくれる新たな課題」 in 『財団法人国際コミュニケーション基金機関誌』 No.16, 1998年4月PP.10-12.

は私が日本の様々な学校を見学することで気が付いた「文化」又は「日本文化」に対する指導者たちの考えを二つの例を上げながら紹介したいと思います。<sup>3</sup>

1996年の6月に、私はある小学校でペルーとブラジルからの子どもたちに日本語を指導する特別授業に参加しました。授業のテーマは「日本文化の紹介 ～流しそうめん～」で、その内容は家庭科の授業のように児童達自身がそうめんを調理し、食べる、といったもので、目的は外国の子どもたちに日本の文化を経験してもらうことでした。”ざる”、”そうめんを流すために使う”竹”、”はし”、”たれ”等について先生が前もって絵を黒板に書いており、ひらがなで読みやすく説明がしていました。いろいろな年齢の子どもが助け合いながら、先生の日本語での指示にしたがって材料を切ったり、洗ったり、集めたりして、子どもたちは楽しそうにそうめんを用意しました。授業の終わりには私も子どもと一緒に流れてくるそうめんを竹で作られた器に入れ、食べました。私たちがそうめんを味わっているとき、周りに日本の子どもたちが興味を示しながらよってきました。先生たちはその子どもたちにそうめんを分けてあげました。そのとき私はおもしろい場面を目の前にしました。ある先生がその子たちに（日本で生まれて育った子どもたちに）「君たちにとっても”流しそうめん”は珍しいだろう。」「竹を通して流れてくるそうめんをお箸で取って食べることなどしたことあるかい。」と話しかけたのです。

一カ月に一度行われるこの特別授業はいつも外国の子どもが主体であり、日本の子どもの参加はありません。日本文化の紹介として何故 ”流しそうめん”を選択しそれを強調してたのか。日本の子ども達にとっても珍しいものを何故日本を代表するものとして外国の子どもに教えてたのか。私はユニークな選択だと思いました。私はこの授業を通して「文化」、「日本文化」に対するひとつの考えを知ることができました。そこには「郷に入っては郷に従え」という思いからではなく日本文化は外国から来た者たちに教える意義があるもので、日本を是非知ってもらいたいとの考えから文化として伝統的なものが重視されていることです。しかしこのように伝統的な文化は日本で生まれて育った子どもにはわざわざ教える必要がないものと見なされていました。もうひとつ関心深いこととは、文化の伝達方法に関しての考えです。文化は教育者が教えるものであって、外国の子どもが日本の子ども

---

<sup>3</sup> A autora retoma o assunto abordado no artigo “Gaikokukarano kodomotati ga kureru aratana kadai” escrito para International Communications Foundation Bulletin, april 1998, nº16, pag.10-12, Tokyo.

もたちから習得するものに対してはあまり重視されない。これらには教師たちの「自文化」に対しての見方が現われていると言えるでしょう。

1997年の10月に私はもうひとつの小学校の日本語指導学級の特別授業に参加しました。この授業では、ブラジルとマレーシアから来た外国の子どもたち11人とこの授業に参加したいという日本の子どもも30人ほどいました。みんなでブラジル語とマレーシア語を使った劇をすることが授業の目的でした。私はブラジルからの子どもの母国語のチェックと先生の指導の通訳を任されていました。来日直後の子どもは先生の話す特に細かい内容は理解できないし、日本に長くいる子どもは反対に母国語を忘れていく傾向があるのです。劇はどの国でも知られている「アリババと40人の盗賊」で、主役は外国の子どもたちに任せられ、日本の子どもたちは脇役や芝居と一緒に流れる音や歌の伴奏を担当しました。発表の日まで子どもたちは体育館に集まって練習を重ねました。年齢の下の子どもは上の子に助けられ、外国の子どもも日本の子どもも一緒に騒いだり、日本語のテーマソングを聞いてもらったりしていました。ここでは、はっきりと文化の学習の授業とは言われていなかったのですが、「そうめん」の授業と同じように外国の子どもは日本文化の習得していると私は感じました。

これはブラジルの子どもたちの指導にあたっているときに私が気付いたことです。日本語しかわからない観客にポルトガル語の台詞を使うとき、なんとかして振り付けで言葉を補わなければいけません。その時、ブラジル人にしか理解できない喜びや怒りの動作や気持ちを表現するしぐさをして、見ている日本人にとっては何が何だかわかりません。例えば「よし、これで大丈夫。」と両手の親指を見せてニヤッと笑ったとしても、表現としては日本では通用しにくいものでしょう。子どもは自分の台詞の意味をきちんと理解して、その台詞のイントネーションをできるだけブラジルでも日本でもわかりやすいものに工夫して変えていきます。先生や日本の子どもに演技を見てもらい感想を聞いてブラジルの子どもは一生懸命になって演技を磨いていきました。それは知らないうちに表現方法を通していつもよりも集中して日本の文化に触れる機会になったと思います。同時に日本の子どもも異文化に触れる機会だったと思います。

この授業の設定からまた「文化」、「日本文化」の考えが見えてきます。教師が伝統的な「文化」を一方的に教えるのではなく、異文化同士の接触の中で習得していく方法で、文化を伝えることができるとの

考えがここにあります。だから、この授業は日本で生まれて育った子どもが初めから授業に参加するものとされてきました。また、彼らの参加が授業に組み込まれていることから、指導者は日本の子どもたちにとっても異文化の経験は必要とし、重視していることがわかります。これらは教師たちのまた違う「自文化」に対しての見方が現われていると言えるでしょう。このように「文化」の捉え方は様々であることがわかります。

今、日本の学校に異文化の子どもたちが通うことにより、教育現場の人が子どもたちに教える新たなことが加えられることになりました。このようにして学校の中で「日本文化」について考える機会が増えてきています。これらの授業を通して教師や生徒たちは日本文化を誰かに伝えようとするとき何が文化であり、またどのようにそれを伝えていくかという課題を持つようになってきました。日本文化を考えることは自らをもう一度知ることにつながるのではないのでしょうか。そのプロセスから、新たな自文化を発見し、認識することになり、これこそが異文化の人を理解する大事な要因であると私は考えています。なぜなら、私たちは自分を認識する方法で他人を認識するからです。

#### 更に詳しく知りたい人に

田村かすみ、長野勤子、友近辰貴 「みんなで劇を創ろうよ～日本穂学習を核にした母語劇創作 4年間の取り組み～」 in 紀要『国際理解』33号、2000年.

チエ・ヒロセ「教育人類学からみた異文化適応-在日ブラジル人児童の学校体験の民族的分析-」 広島大学大学院社会科学部国際社会論専攻修士論文、1998年.

チエ・ヒロセ「明るくて楽しい学校ーブラジル」 in 『世界の学校ー比較教育文化論の視点にたつて』 二宮皓編、福村出版 1995, p. 62-75.

HIROSE, C., LIMA, Florice S., AVANZI, Mara “Projeto: sentindo, pensando e aprendendo- uma busca além do ler, escrever e fazer contas” in *Filosofia e Educação – Estudos 2*. S. Paulo: Factash/CEMOrOc-Feusp, 2007,v.2. p.29-58.

HIROSE, Chie. “A experiência da academia e da sala de aula: Visão dos apresentadores (Entrevista concedida)” in ROSA Stela (Organização) *Memória do Fórum Mundial de Educação : alternativas para construir um outro mundo possível*. Brasília: Inep/MEC 2007. p. 232 e 233.

Recebido para publicação em 03-11-11; aceito em 03-12-11